座長：広瀬　京子
東京医療学院大学保健医療学部 看護学科

P2-027

がんの子どもを担当する看護師が捉える復学支援の連携

武澤 友弘
広島大学病院 看護部

【目的】
小児がんは、集学的治療の導入とその効果よって治療成績が向上した。以前は、治療中心で復学支援を考える余地がなかったが、現在は、その重要性を問われるようになった。しかし、看護師の役割における復学支援の到達度や連携の必要性は明確とされておらず、困難にしている要因であることが考えられた。以上のことから、がんの子どもを担当する看護師が捉える復学支援における連携の現状と課題について明らかにすることを目的とした。
【方法】
本研究は、質的記述的研究デザインを用いた。研究協力者は、がんの子どもの復学支援を担当したことのある看護師8名に半構成的面接を行った。また、日本赤十字広島看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。
【結果】
全てのインタビュー内容から看護師が捉えるがんの子どもの復学支援の連携について分析した結果、90のコードから27のサブカテゴリーを生成した。さらに、サブカテゴリーの類似性と相違性から、【がんの子どもの個別性を正確に把握する】、【がんの子どもが円滑に復学するために家族と協働する】、【復学支援の連携は病棟からはじまる】、【がんの子どもと家族に必要な医学的な側面について医師から指導する】、【教員と情報共有を行いながらチーム医療のための関係性を構築していく】、【前籍校教員は家族、医療者からがんの子どもの情報を得ている】、【外来看護に必要ながんの子どもの情報を共有し、看護の主体を円滑に移行する】の7つのカテゴリーを生成した。
【考察】
看護師は、子どもと復学にむけて同じ目的を共有し、関係性を築いていく中で協働関係が成り立ち、【がんの子どもの個別性を正確に把握する】ことに繋がっていると考えられた。また、子どもは家族の支援が必要不可欠であるため、子どもと家族の気持ちを汲み取り、家族と看護師が子どもの復学に目的を合わせて協働していく必要があると思われた。そのため看護師は、復学支援における役割、期待から【復学支援の連携は病棟からはじまる】と考え、看護師・子ども・家族の協働関係から医師、院内学級教員、前籍校教員などの多職種への連携がはじまっていることが考えられた。外来看護師との連携では、子どもは復学後も定期的に外来通院が必要であるため、【外来看護に必要ながんの子どもの情報を共有し、看護の主体を円滑に移行する】必要があると考えられた。

P2-028

医療的ケアが必要な児への在宅療養に向けた取り組み
―多職種カンファレンスを重ねて―

油村 友香、小柳 翔、富田 恵子
鳥取大学医学部附属病院 小児総合病棟

【目的】
近年、医療的ケアを必要としている小児が増加し、在宅療養に向けた支援を入院中から行っていくには多職種との連携が不可欠である。
今回は、出生後から入院を継続している小児への在宅療養に向けて、多職種連携を図りながら一時退院が可能になるまでのプロセスに沿い、医師、看護師、リハビリ、栄養士、薬剤師、保育士、社会福祉士、訪問看護師（以下、多職種と略す）との必要な連携について検討し、望ましい多職種連携の在り方について明らかにする。
【方法】
1. 対象：小児総合病棟に短腸症候群で入院中の中心静脈栄養が必要な3歳女児
2. 期間：20XX年○月から2年7ヶ月
3. 倫理的配慮：代諾者となる家族に文書を用いて研究の趣旨を説明し、個人が特定されないように配慮を行い、代諾者の同意を得た。
【結果】
患児が在宅療養に向かっていくために、まずは家族のニーズを把握した。家族は、自宅で患児の医療的ケアを行うことに自信を持っており、「早く家に帰りたい」と強く表出があった。そのため、在宅療養での訪問看護師の介入を拒否していた。しかし、医療的ケアが必要な患児にとって、今後の在宅療養を見据えると訪問看護師の介入が必須であった。そこで、家族を含めた多職種カンファレンスの開催を定期的に1回/月行った。カンファレンスでは、患児が在宅療養するにあたっての方向性や認識の統一、現在生じている問題点を話し合う場を設けた。多職種が集まり患児の現状を話し合う姿に、家族からは「たくさんのスタッフが関わってくださってありがたい」と少しずつ在宅療養に向けて訪問看護師への受け入れに対する思いに変化が表れた。また、患児の医療的ケアを家族や訪問看護師に指導し、ケア方法や観察項目などのチェックリストの作成と入院中と在宅療養で管理方法に相違が無く支援が継続できるようにした。
実際に外泊や一時退院の開始後は、帰院時に自宅での様子、トラブルの有無を家族と共に振り返った。また、訪問看護師からの報告も踏まえて、再度多職種で問題点などを抽出し、カンファレンスを継続している。
【考察】
医療的ケアを必要とする小児の在宅療養に向けた多職種連携は、担当する各職種が持っている情報を共有することで、支援の方向性を明確化し、各職種が役割を担い、絶え間ないケアを繋ぐ支援となっていた。また、家族にもカンファレンスに参加してもらうことで、医療者との繋がりがより強いものになったと考える。

Presented by Medical*Online